

Vol. 4
難民と共に
築く平和

Refugee is

Special Issue ランドスケープデザイン
平和構築の景観設計

平和構築の景観設計



©UNHCR/1.Guest
将来への希望を持ち、ハタンボンの農地に立つカンボジア帰還民

平和構築は数学でも建築でもない。
だから平和を築る方法は幾通りもあるだろう。
様々な角度から平和の風景を眺めていけば、平和の設計図が見えてくるかもしれない。

Contents

政策づくりの風景

- ① 難民帰還は平和構築の第一歩 ヨハン・セルス/UNHCR駐日代表
- ② TICAD IVとUNHCR:平和の定着と難民問題 アントニオ・グテーレス/国連難民高等弁務官
- ③ 平和のダイヤモンドを磨く 星野俊也/大阪大学大学院教授

現場から見た風景

- ④ 南部スーダン—平和構築の実験場— 『ママ・カクマ』より、『毎日新聞』より
- ⑥ 「生か死か」UNHCR eセンターの研修 マイケル・デラミコ/eセンター・コーディネーター
- ⑦ J-FUNの目指す「楽しい」難民支援 J-FUN共同議長 橋本笙子/ADRA Japan事業部長
岸守一/UNHCR駐日副代表
- ⑧ ジャパン・プラットフォームの試み NICCOのオリーブオイル、SVAの図書館

女性から見た風景

⑩ 特別座談会 菊川怜×平和を築る女性たち

菊川怜/UNHCR駐日事務所のスペシャルサポーター 木山啓子/特定非営利活動法人ジェン(JEN)事務局長
鈴木順子/『外交フォーラム』編集長 米川正子/国際協力機構(JICA)アフリカ部客員専門員
岡井朝子/外務省アフリカ第二課長 坂下可奈子/UNHCRユース第1期共同代表

人づくりの風景

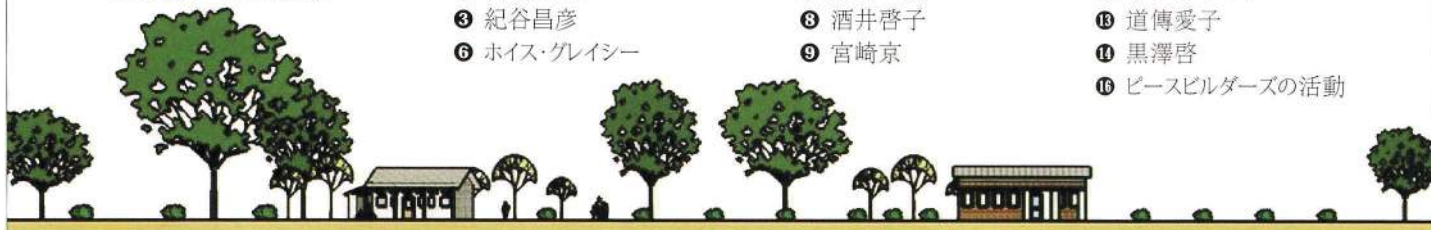
- ⑭ 女性の自立支援の取り組み 根本かおる/日本UNHCR協会事務局長
- ⑮ ビジネス界でも平和構築 水田慎一/三菱総合研究所主任研究員
- ⑯ 平和構築の人材育成 篠田英朗/広島大学大学院教授、辻澤明子/HPCプログラム・アソシエート
- ⑰ ルワンダの経験「平和構築のモデルケースに」 エミール・ルワマシラボ/駐日ルワンダ共和国大使

広がっていく風景

- ⑱ 表参道ジャック2008 「街からはじまる難民支援—難民ってカッコイイ。」
- ⑲ 平和の風景を描く
『外交フォーラム』より—90秒間で語る平和構築—
長有紀枝/難民を助ける会理事長 水野孝昭/朝日新聞論説委員 渋谷ザニー/ファッションデザイナー

Column:遠景近景

- ② 長島美紀
- ③ 紀谷昌彦
- ⑥ ホイス・グレイシー
- ⑦ 逢沢一郎
- ⑧ 酒井啓子
- ⑨ 宮崎京
- ⑫ マエキタミヤコ
- ⑬ 道傳愛子
- ⑭ 黒澤啓
- ⑯ ビースビルダーズの活動



掲載記事の転載をご希望の方は、UNHCR 広報室へご相談ください。

UNHCR(ユー・エヌ・エイチ・シー・アール) /
国連難民高等弁務官事務所駐日事務所
〒150-0001
東京都渋谷区神宮前5-53-70
国連大学ビル6階
TEL 03-3499-2011
FAX 03-3499-2272
URL www.unhcr.or.jp

UNHCRマガジン
「Refugee is...」
Vol.4 2009年2月

発行人 岸守一
編集 守屋由紀、古本建彦
デザイン 齊藤華佳子
制作・AD 株須田製版

UNHCRの活動はみなさまのご寄付に支えられています。ご寄付は日本UNHCR協会を通じてお願いします。日本UNHCR協会はUNHCRの公式支援窓口です。

郵便振替口座
口座番号 00140-6-569575
加入者名 日本UNHCR協会

難民帰還は平和構築の第一歩



© UNHCR/A. Hollman

マウンドー郡にて家族と再会するミャンマー帰還民

平和構築は、私がUNHCRでの職務を通じて、特に密接に関わり、取り組んできた分野である。昨年9月に日本に赴任してきたばかりだが、日本の方々の平和構築への関心、そして特に難民、国内避難民、またその他の紛争により苦境を強いられた人々に対する人道支援事業へのサポートに励まされた。

我々は皆、平和構築とは何か、についてそれとなく理解している。紛争予防に係る者は、いかにして緊張や衝突を和らげ、交渉を通して平和的合意につなげるかに注目する。また開発分野の専門家は、潜在的なキャパシティや社会の制度や基盤、貧困の削減に着目する。人権問題の専門家は、平和構築を正義と刑罰から逃げ通せる状況を終わらせる為の観点からアプローチするであろう。また主として国家とその制度・基盤に着目する者もいれば、一方では市民とコミュニティに着目する者もいるのである。

UNHCRは平和構築に人間の安全保障の観点を取りいれている。すなわち人間個人を中心とした視点である。当該国政府や市民社会と共に、我々は難民を保護・援助し、そして彼らの苦境の解決に向けて取り組まなければならない。これは非常に困難であり複雑な課題である。故郷へと帰還することは、紛争で避難を強いられた人々が、最も強く望むことである。しかし、政治的危機には人道的解決はない。したがって我々は、和平合意の中に帰還する難民たちの利害が考慮され、また同様に復興戦略や国家

開発計画の中に組み入れられることを確実にしなければならない。

しかしながら、難民や国内避難民たちの行く末について、あまりにも頻繁に忘れられてしまっているのだ。パキスタンとイランに残る300万人にもほぼるアフガン難民たちのことは、ニュースではほとんど取り上げられていない。200万人のイラク人国内避難民と、シリア、レバノンそしてヨルダンにいる200万人のイラク人難民たちも、同様だ。

もし我々がこれらの未解決の難民や強制移動の問題を提起できなかった場合、我々は平和的なコミュニティや国家を築くことができず、さらに将来緊張や不満を生み出すことになるかもしれない。国際社会において、日本は重要な役割を担ってきた。国連安全保障理事会の非常任理事国と、またニューヨークでの国連平和構築委員会議長国として、日本は紛争予防、人道問題、そして平和構築に対して、強力な唱道者となってきたのだ。また、ますます日本のNGOが紛争後間もない状況において、広範囲な分野でのプロジェクトを実行している。ビジネス界もまた同様に、紛争によって破壊されたインフラの再建に対し活発に支援を行なっている。数々の女性活動グループは、平和へのプロセスとコミュニティの再構築において、自らが果せる役割に注目している。

平和構築の様々な側面を挙げたが、我々が皆で協働し、同じ目的を共有することが大

切なのである。我々全てにそれぞれの役割があり、果すべき責任があるのだ。この雑誌に寄稿されているそれぞれの記事は、これらの異なる側面に光を当てている。一人ひとりのストーリーは、どれも皆我々を勇気付け、我々よりずっと不幸な日々をおくる人たちの生活に、我々個人がいかにして具体的な変化をもたらすことができるかを、示してくれている。

今回の「Refugee is...」がたくさんの読者の方々にとって、戦争や紛争、その他の危機から逃れてきた人々を支援する為に、大小に関わらずなにか具体的な一歩を踏み出すきっかけとなることを願っている。彼らはあなたの支援を必要としています。そしてUNHCRも。



©日本UNHCR協会

ヨハン・セルス
UNHCR駐日代表。UNHCR職員として、イラク北部、トルコ東部、ブルガリア、エチオピアなど世界各地で18年以上人道支援に携わる。緒方貞子氏とアマルティア・セン氏が共同議長を務めた人間の安全保障委員会ではプロジェクト・リーダーを務める。その後、ニューヨークにて平和と安全担当のシニア・ポリシー・アドバイザーを経て、2008年9月より現職。

TICAD IVとUNHCR:平和の定着と難民問題

2008年5月に横浜で開催された第4回アフリカ開発会議(TICAD IV)では、4つのテーマにそった分科会が開催されました。その1つ「分科会C:人間の安全保障の確立:平和の定着とグッドガバナンス」では、アントニオ・グテーレス国連難民高等弁務官が共同議長を務め、平和の定着・人道復興支援、紛争予防などの様々なテーマについて議論が交わされました。以下に、グテーレス高等弁務官による分科会の総括の一部を紹介します。

平和の定着・人道復興支援について

平和の定着を図るにあたり、必要となるアクションは多岐にわたります。そのため、分科会では難民や国内避難民の帰還支援の必要性から、教育や保健など基礎的社会サービスの提供まで議論されました。また、帰還民が地元社会で受け入れられるためには、和解の取り組みも重要な要素です。さらに帰還後の土地の所有権をめぐる係争処理のメカニズム構築や女性・子ども・高齢者などへの保護と支援などの重要性も議論しました。そして、地域における安全と、移動の自由、帰還とその後の基本的な社会インフラへのアクセスと経済活動の再開を図る上で、地雷除去は重要な活動の一つとして言及されました。帰還民と地元コミュニティのキャパシティビルディング(能力向上支援)を通じて、両者が市民社会の再構築と、社会への再統合を図る事も急務であります。

こうした問題は、これまでも長い間議論されてきており、迅速性と継続性の双方をそなえたアクションが実行されることが、何より今必要です。そして、それらが一貫性と十分な調整の下に実施されなければなりません。そのため、平和の定着と人道復興支援を考える上で「人間の安全保障」という概念の重要性をあらためて認識しました。



©UNHCR/B. Hannon
ダターフ・キャンプにて難民の一家と話すグテーレス高等弁務官(ケニア)

紛争予防

教育や訓練は、紛争予防の鍵として認識されています。子どもの時点からの教育により、より建設的な選択肢を若者に提供し、平和の文化を育むことができます。こうした紛争予防への投資は、紛争発後の対処に必要な費用に比べてより少ない費用で、人々を救うことを可能にするのです。

グッドガバナンス

難民や国内避難民の帰還と再統合を始まりとした平和の定着・人道復興支援の成果をより持続可能なものとするためにも、グッドガバナンスは大切であります。

アントニオ・グテーレス

第10代国連難民高等弁務官。1991年にポルトガル難民評議会を創設。1996年より2002年までポルトガル首相を務め、先頭に立って国際的協力に尽力した。2000年初めには欧州理事会議長として第1回EU(欧州連合)・アフリカ首脳会議の共同議長を務め、いわゆるリスボン・アジェンダを採択に導いた。2005年6月より現職。

遠景近景

アフリカの豊かな側面を

「アフリカのイメージは何ですか」という質問、あなたは何と答えますか？

私が一番驚いたのは「黒い」、という答えだった。アフリカが「国」だと思っていた高校生もいた。これらの回答は、2008年に横浜で開催された第4回アフリカ開発会議に先駆けて、市内の小中学生に配布されたパンフレットの製作に関わった時に耳にしたものだ。

「アフリカ」というと、難民や飢餓といったネガティブなイメージが強い。「アフリカの難民支援」というと、「またか」という気になると言った人もいた。大半の日本人にとって、アフリカは異国の世界の物語に過ぎない。

「なぜ日本のメディアは悲惨なアフリカの話だけを報道するのか」と嘆いた在日アフリカ人がいた。難民・紛争・飢餓・感染症といった負の側面と対極にある、アフリカの豊かな側面、人々の素晴らしさを伝えて欲しいという彼の願いに、私たちはどう応えられるだろうか。

UNHCR駐日事務所は、近年、UNHCRコースによる企画やスポーツイベントなど、難民問題に取り組むための入口作りに努めてきた。キーワードは「誰でも一歩踏み出せること」。難民というネガティブなイメージをポジティブなものに変えようというUNHCRの取り組みに期待したい。

長島美紀
株式会社リスメディア、コミュニケーション・プランナー。
TICAD市民社会フォーラムでもRun for Africaを手がけるなど活躍。



平和のダイヤモンドを磨く

激しい内戦をくり返してきた国では、たとえ紛争当事者間に和平合意が結ばれたからといって気を抜けない。憎悪と対立の根は深く、ギアを切り替えるようにすぐさま和解が実現することはない。合意に安堵した国際社会の関心や支援が薄れるなか、和平のわずかなほころびから暴力の再燃につながったケースも多い。かりそめの平和をつなぎ止め、当事者たちのコミットメントを定着させるための努力——平和の構築——に対する国際支援は重要度を増している。

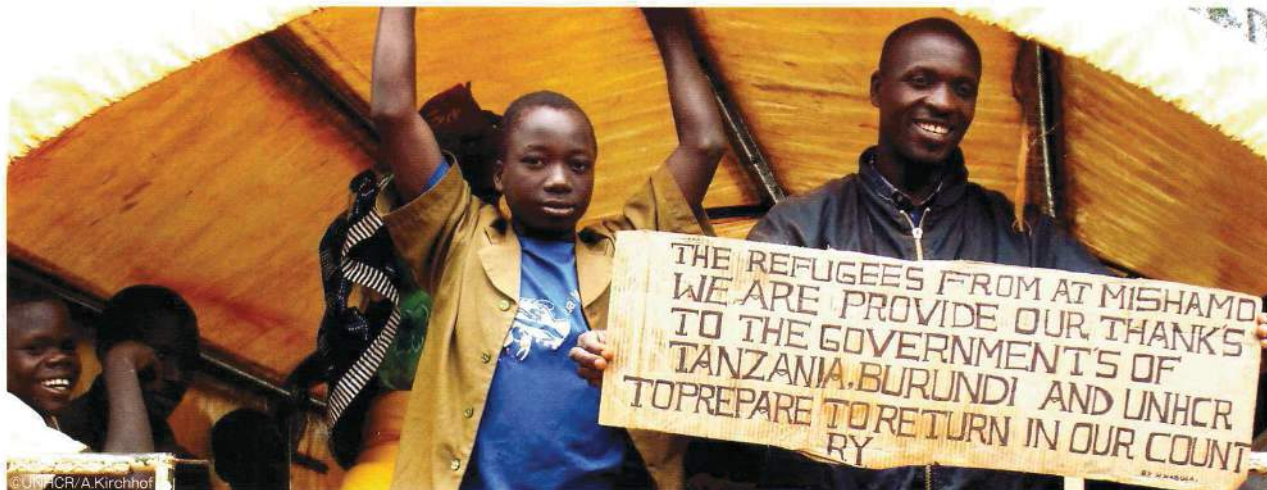
平和構築の営みとは、ダイヤモンドの原石に「平和」という輝きを与えるために磨き上げる作業に似ている。無機物のダイヤが持つ潜在的な輝きを最大限に引き出すには、人々が真心を込めて多くの断面(カット)を磨き、それが一つの有機的な全体をなすように仕上げる必要がある。その品質やデザインは画一的でなく、所有する人々の心を

打ち、納得させ、尊ばれるものでなければならぬ。それはどの紛争にも独自の背景と力学があることから、平和のかたちも決して一つではないのと同様である。

事実、持続的な平和を構築するには、新生国家における権力構造や権威(正統性)の再構築、人々の能力強化と対話、及びそれらを促進する財源の確保を統合的・戦略的・立体的に進めていく必要がある。現場では、人々が平和を実感できるように、治安・開発・人権・人道といった分野のさまざまな活動を切れ目なく実施していくことが求められる。2005年に設立された国連平和構築委員会(PBC)はまさに、こうした平和構築努力を当事国と国際社会が一体となって推進していくための戦略的なアプローチ作りを支援する政治機関である。日本はPBC第2代議長国として2007年6月から2008年末までリーダーシップを発揮した。

紛争に伴って発生した難民や国内避難民(IDP)たちの帰還と社会復帰も、「平和構築ダイヤモンド」が真の輝きを取り戻す上で最重要の課題の一つである。この点は、グテーレス国連難民高等弁務官やケリンIDP担当国連事務総長特別代表を囲んで行ったPBCでの議論でも再確認され、共通認識ができつつある。難民・IDP問題は、現在PBCが支援するアフリカのブルンジやシエラレオネでは治安部門改革、元兵士の社会復帰、土地所有権問題、基礎サービスやインフラ、雇用機会創出等の問題などと関連して議論されている。まさに、平和構築のための統合的・戦略的・立体的な取組みのモデルケースといえよう。

星野俊也
大阪大学大学院国際公共政策研究科教授。2006-2008年まで日本政府国連代表部公使参事官として平和構築委員会にも深く関与。日本UNHCR協会理事。「行動する学者」として、理論と現場をつなぐ。



© UNHCR/A. Kirchhof
タンザニアより故郷へと帰還するブルンジ難民たち

遠景近景

平和構築フォーラム
平和構築に関わる様々な人たちのネットワークを
目指して

今、「平和構築」は、国際社会の主要課題として大きな注目を集めています。この機運をとらえて、2006年5月に「平和構築フォーラム」が発足しました。平和構築に関する(1)情報や知見の共有、(2)政策や活動に向けた新アイデアの検討、そして(3)人材育成に資する、情報交換やネットワーキングの場を提供しようという試みです。政府・国際機関・NGO・研究者の有志が個人の資格で発起人となり、当初はこの4者を結ぶ「ダイヤモンド」を考えていましたが、ユース、企業、メディアなど、「多角形」の頂点の数が徐々に増えてきています。



© 筆者提供
2006年5月31日に開催、約150人が出席した第1回セミナーの様子

これまで2年半の間に、UNHCR駐日事務所などと連携してのセミナー開催(約20回)、ニュースレター(メールマガジン)の発行(30号以上)、フォーラムの活動報告や平和構築関連文献紹介・リンク集を盛り込んだウェブサイトの運営などの活動を進めてきました。

平和構築には、まさに幅広い分野の人たちの協力がが必要です。世界各地の平和構築に向けての取組のあり方や、私たち一人ひとりができること、すべきことについて、これからも議論を深め、行動の輪を広げていければ幸いです。

詳細は www.peacebuilding.jp

紀谷昌彦
平和構築フォーラム共同発起人。
外務省国連企画調整課長。



南部スーダン—平和構築の実験場—

2008年(平成20年)9月24日(水) 毎日新聞より抜粋

文：隅俊之 写真：西村剛

特集

毎日新聞

2008年(平成20年)9月24日(水)

難民支援 長期的な視点で 南部 帰還ピーク

スーダン

22年間に及ぶ南北内戦で約50万人の難民と450万人以上の国内避難民を生み出したスーダン。包括的和平合意が成立した5年以降、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の支援などで約29万人の難民が南部を中心に帰還した。そして国内避難民も含めれば約250万人が故郷の地を踏んだ。3年に及ぶ帰還事業は今ピークを迎えている。

戦闘が激しかった南部には復興事業が進む。国際的な援助の中で、日本のNGOも実績を上げている。難民を助ける公(本部、東京都)は、東エカトリア州で50本の井戸を建設。広範囲で給水できる簡易水道も建設する。ジョングレイ州で活動する「ピースウィズ・ジャパン」(同)も7本の井戸などを建設した。生産力を失った南部では、物資を輸入に頼るため井戸一本の建設に170万円程度がかかる。それでも、生命線の水を求めて戻国に集結できる。井戸建設は帰還の大きな動機付け。また手洗いの励行など衛生教育も同時に行い、コレラなど感染症を抑える事業を進められている。



「懐かしい土の匂いがします」。難民キャンプからバスを降り、帰還民が社会に定着するまで見守る責任がある。もう一度、南スーダン政府が設立されたが、北部の民兵政府との間で、南北の衝突は止まらない。南スーダン政府は、南スーダンの石油資源をめぐる対立がくすぶる。2011年には南部独立の是非を問う国民投票が予定されている。ウガンダ国境に近いニムレにあるウエスチン(帰還民の3カ月分の食料や被褥の備蓄所)で、帰還民が自力で生きていくことに

「懐かしい土の匂いがします」。難民キャンプからバスを降り、帰還民が社会に定着するまで見守る責任がある。もう一度、南スーダン政府が設立されたが、北部の民兵政府との間で、南北の衝突は止まらない。南スーダン政府は、南スーダンの石油資源をめぐる対立がくすぶる。2011年には南部独立の是非を問う国民投票が予定されている。ウガンダ国境に近いニムレにあるウエスチン(帰還民の3カ月分の食料や被褥の備蓄所)で、帰還民が自力で生きていくことに



避難先のウガンダから戻り、祖国の地を踏んだ帰還民。南スーダン南部ジュバのウエスチンで

「国の未来 支えたい」

日本のNGO、整備士養成

復興とともに南部では物資の輸送が活発になり、車の交通量が急増している。だが、未整備の道路や度重なる急ブレーキ事故が原因で、自動車整備士は大きな需要がある。ジュバで活動するNGO「日本国際ボランティアセンター」(JVC)は、日本国際ボランティアセンター(JVC)で整備士として迎え入れ、整備士として養成している。

整備士養成には、JVCの修理工場敷地内には国連機関などの自動車教習所が修理を待っていた。16年前、教習所は15人の修理工の中に一人の女性がいた。ジョンス・ナボロさん(21)は、16年前、教習所を離れ、3日間歩き通して家族をケニアに連れてきた。そして、ジュバに家族とともに帰還した。何かが仕事を探そう。だが、荒廃した街では仕事もなく、技術を身につけるためにJVCで研修生として学び始めた。



当初は車に知識がなかったが、工場では日本人スタッフらが教板や機具などの技術を身につけ、教習所に入った。おかげで今は修理する車は70台以上になる。「将来はインフラとして国の復興と家族を支えていきたい。大きな希望が見えている。彼女はそう笑顔で話した。

現場から見た風景

—いつの日か故郷に帰る—

2005年1月、スーダンの南北和平合意が達成され、23年間の内戦に終止符が打たれた。今、ケニアやウガンダ、エチオピアや中央アフリカなど周辺国に逃れていた難民が南部スーダンに帰還している。どの家族でも、そのパターンはいつも似ている。まず、家族のうちで頑強なお父さんやお兄さんが先遣隊となって故郷の村の様子を見に帰る。その後、彼らは一度難民キャンプに戻り、そこで家族会議が開かれる。故郷に帰りたい。でも確かめたいことがある。井戸は枯れてないか？病気になるらどうする？そして子どもは勉強を続けられるのか？家族会議の話題は大概この3つである。

水と衛生、そして学校。UNHCRは、難民たちが故郷に戻りやすいように村の環境を整えている。NGOのパートナーと一緒に。日本からは難民を助ける会とピースウィンズ・ジャパンが井戸を掘り、ADRA Japanは難民が帰国した際の一時滞在センターを設置し、日本国際ボランティアセンター（JVC）は難民の職業訓練をかねた自動車修理工場を運営する。キャンプで勉強した難民の中には才能のある人も少なくない。JENIは、優秀な難民をまず学校の先生として養成してから故郷に帰す「難民教師養成学校」プロジェクトのパートナーだ。

「いつの日か故郷に帰る」

難民の誰しもが長い間見続けた夢が、今、スーダンで現実になる。

彼ら難民が、持っていないものを他人からもらうのではなく、既に持っている才能や情熱や誇りを認められ、誉められ、伸ばされて、誰か他の人の役に立てるように、少しでも背中を押してあげる。今はそんな支援が求められているのではないか。

平和は誰かから与えられるものではない。平和とは、難民たちが自分たちで、地元の人たちと共に、持てる力を振り絞って自ら勝ち取るものなのだから。

(編集部)

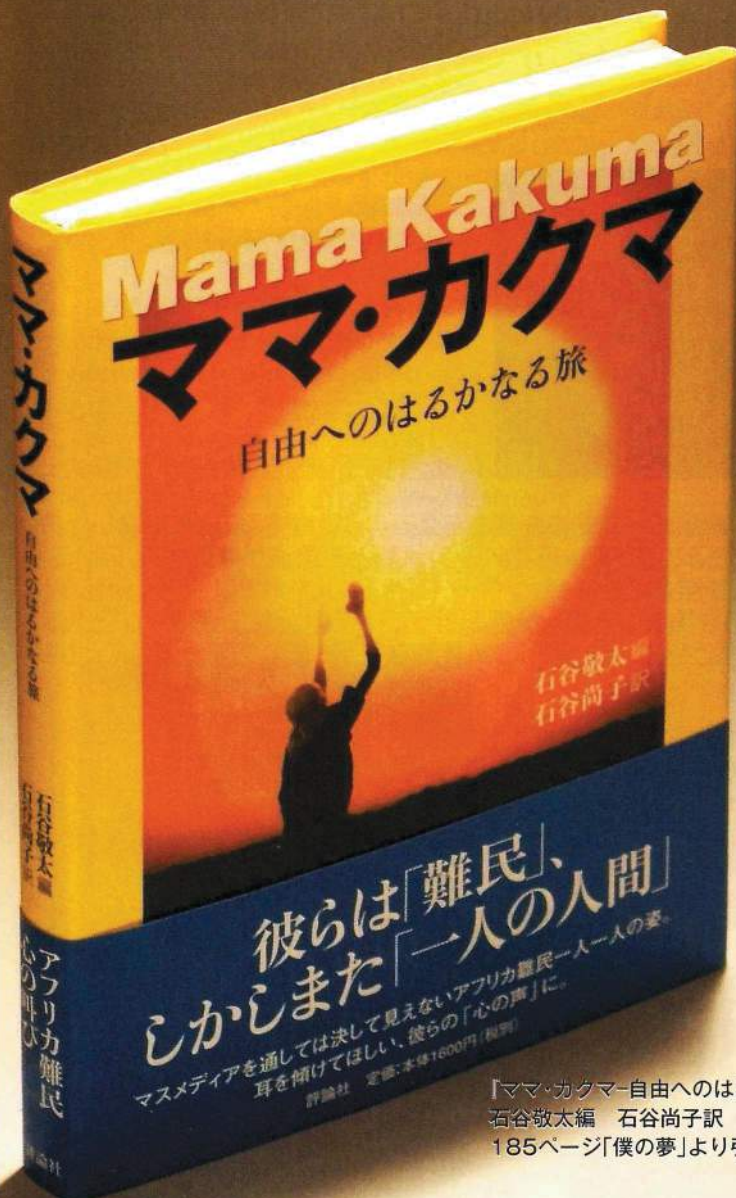
僕には夢がある
深いところに根っこがある夢だ
祖国の人々の希望に根っこがある夢だ

僕にはまだ夢がある
いまは貧しい僕の国だけ
いつか空腹が終わるはず
いつか飢えから解放されるはず
そうすれば僕たちは一つになる
そうすれば平和と自由が実現する

自由の鐘を、空っぽの胃袋から鳴らそう
自由の鐘を、幼子たちみんなで鳴らそう
自由の鐘を、スーダンのほったて小屋から鳴らそう
難民を支援するすべての国で、自由の鐘を鳴らしてもらおう

そういうことが起きてはじめて
スーダンをもっといい国にしてはじめて
僕たちはスーダンを他の国々と対等に見ることができる、
歌うことができる
いつか自由になる、いつか自由になる
全能の神よ、感謝します
僕たちはいつか自由になるんだ

作 スーダン国籍アップバー(ナイルヌエール族)男性、23歳。
1987年戦火を逃れてエチオピアのハイネド・キャンプへ入り、1992年にカヌ、



「ママ・カクマ-自由へのはるかなる旅-」
石谷敬太編 石谷尚子訳 評論社
185ページ「僕の夢」より引用

「生か死か」UNHCR eセンターの研修

現場から見た風景

「マードン国での迫害のため避難したワチラと彼の家族は、ついに隣接するスレミア国の国境にたどり着いた。しかしそこでスレミア国の国境警備隊に止められてしまった。今、彼らの運命は現地の人道支援活動家で構成される小さなチームにかかっている。チームは国境警備隊と交渉し、この難民家族の安全な入国とスレミア国内での庇護を勝ち取らなければいけない」

これはUNHCR駐日事務所内の「eセンター（アジア太平洋地域人道支援センター）」がタイで開催した人道支援に関する研修の、シミュレーションのひとつだ。研修の参加者はアジア太平洋地域の40カ国から集まった人道支援者たちである。タイ国軍と100人以上のボランティアの協力で作られた架空の状況の中、彼らは交渉技術や難民に関する知識などをすべて活用し、短時間で問題を解決しなければならない。

eセンターの研修は難民問題を中心として構成されている。しかし特筆すべきことは、国連平和維持局（DPKO）がシニアレベルの平和構築活動従事者に対して行っている別の研修でも、eセンターのスタッフが作成した、同様のシナリオが利用されているということだ。



©Bangkok Post, Photographer's Collection

しかしなぜDPKOのシニアスタッフが難民や国内避難民について学ぶ必要があるのだろうか。

実は人道問題は、政治的な対立などと密接に関連しており、人道問題を解決することが紛争を解決し、平和を構築するという、より大きな目標を達成する助けになるのだ。特に、難民や国内避難民の安全で持続的な帰還は平和構築にとって欠くこ

とのできない要素だ。そのためアフガニスタンやバルカン諸国、ブルンジなどのUNHCRの主な帰還事業はこれまで、平和構築活動と密接な連携が取られてきた。

また不安定な国はしばしば不安定な地域にあるため、たとえ紛争の終結した国での活動であっても、近隣国から難民が大量に流入してくる可能性を排除することはできない。これは近年のバルカン諸国やアフリカの中・西部、そして中東での経験を見ても明らかだろう。そのような状況への対処を誤ると、折角の平和構築の成果が無に帰してしまう危険性があるのだ。

詳細は www.the-ecentre.net



©Bangkok Post, Photographer's Collection

マイケル・テラミコ

UNHCR・eセンターコーディネーター兼上級地域安全対策官。2001年にUNHCRジュネーブ本部にて上級地域安全対策顧問として着任後、上級訓練官を経て現職。その間、スーダン、スリランカ、パキスタン、コートジボワール、ブルンジ等で緊急活動に参加。

人道支援チームはスレミア国境で、警備隊が難民の家族に一時的に庇護を与えるよう説得することに成功した。こうして、ワチラとその家族はひとまず、安全に今晚眠ることができるであろう。人権と国際法が尊重され、スレミア国の平和と安定にも寄与することだろう。さらに、重要なことはeセンター、DPKOのいずれにしても、研修を受けた人々が緊急支援と長期的な平和構築の適切な橋渡しをする役割を担っていくということである。こうして、ワチラのように窮地に直面した人々は今日の人生と自由、また明日の持続的な平和と安定を享受することができるのだ。



©UNHCR

ホイス・グレイシー
ブラジル・リオデジャネイロ出身、格闘家。1993年、格闘技チャンピオンシップ(UFC)にて優勝。その後2度もチャンピオンの座を勝ち取り、2000年より日本のPRIDEに参戦。現在は現役選手としてだけでなく指導者としても活躍の場を広げている。

遠景近景
本当に強いということ
「本当に強いということは、試合で勝つことじゃない。毎日繰り返し練習を、忍耐強くこなしていくことだ」
K-1やPRIDEで名を馳せた総合格闘家、ホイス・グレイシーの言葉です。2008年9月4日に開催されたUNHCR主催の難民支援現場の安全について考えるワークショップでは、参加者への護身術ワークショップも実施された。eセンターの研修でも繰り返し強調されるように彼は、「どんなに厳しい状況に遭遇しても、最悪の事態を想定した訓練を行ってれば、柔軟に対処できる」と述べ、数々の危険が伴う難民支援現場での安全を確保するためにも、前もってしっかりと訓練を積む重要性を訴えていました。



J-FUNの目指す「楽しい」難民支援



©UNHCR

UNHCRと難民支援に携わるNGOでつくる J-FUN (Japan Forum for UNHCR and NGOs-日本UNHCR・NGO評議会)が2006年6月に設立されて約2年半。この間、UNHCR議員連盟との会合を5回開催、UNHCR駐日事務所及びUNHCRユースと共に表参道での難民支援啓発イベント「表参道ジャック」を2回成功させ(P18-19参照)、企業とNGOの連携を進めるなど活発な活動を続けてきた。

J-FUN共同議長の橋本笙子ADRA Japan事業部長は「J-FUNという枠組みがあることでNGOの声が大きくなり、活動が取り上げられるようになってきた。NGOの期待も大きい」と手ごたえを感じている。

実はJ-FUNのFUNには、「楽しさ」という願いも込められている。「難民支援の現場は楽しいと表現されるような環境ではない。一般の人から見れば、自分とは関係ない遠い世界と思われがち。サッカーや料理や映画などを通じて誰でも気軽に難

民支援に触れられる枠組みが作りたかった」ともう一人の共同議長、岸守—UNHCR駐日副代表は言う。

難民支援の最前線で井戸を掘ったり、学校や病院を建てたりできるNGOは、特殊技術を持ったプロの集団だ。日本のNGOは支援の現場で信頼と実績を重ねつつあるが、日本社会における待遇やイメージ改善は追いついていない。

橋本共同議長は「一般の方たちを楽しく巻き込んで、日本発のユニークな人道支援につなげていければ」と今後の抱負を語った。J-FUNの挑戦は今始まったばかりだ。

詳細は www.j-fun.org



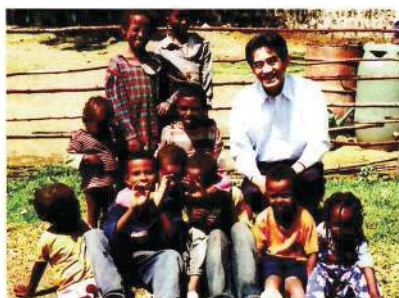
遠景近景

日本のNGOの体力強化を

UNHCR議員連盟の事務局長として過去6回にわたって、人道支援の現場でUNHCRとともに活動しているNGOの方々とは人材育成や安全管理などのテーマについて意見交換をしてきました。

南部スーダンやアフガニスタンでの活動などで分かる通り、日本のNGOもかなり実力をつけてきました。しかし、欧米のNGOに比べるとまだ体制や体力の面で十分とは言えません。財政面の問題は深刻で、働き盛りの30代がNGOに残りたくても、待遇面で残れない状況があります。

過去にはアフリカや中東、アジアなどで難民キャンプを視察してきました。出身国への帰還、第三国定住などをさらに進めていかなければなりません。また難民キャンプへの支援も必要で、NGOの協力は必要不可欠です。今後も意見交換を基に、NGOの体力強化という課題に取り組んで行きたいと思えます。



逢沢一郎 ©筆者提供
衆議院議員、UNHCR議員連盟事務局長、元外務副大臣。
アフリカの難民キャンプに自ら足を運び、J-FUNとの対話でも国会議員側座長を務める。



ジャパン・プラットフォームの試み

現場から見た風景

ジャパン・プラットフォーム(JPF)とは、NGOや経済界、政府の三者が対等なパートナーシップの下、国際緊急援助や復興支援を迅速かつ効果的に実施するためのシステムとして設立されました。しかし、現在JPFの活動資金の約9割は外務省から賄われ、民間資金はほんの1割程度です。民間資金は自然災害などの一時的な緊急事態に対応する際には集まっても、長期的な関与を必要とする平和構築には、まだまだ集まりにくいのが現状です。そうした中、JPFの目玉事業として2007年に平和構築パイロット支援事業がスタートしました。同事業では、企業や個人からの民間寄付金を用いながら、これまでJPFの助成で実現できなかった長期化した難民状況への取り組み、紛争予防や民族間の信頼醸成に対する活動などへの助成を行っています。今回はその中でも、UNHCRのパートナーでもある(社)日本国際民間協力会(NICCO)と(社)シャンティ国際ボランティア会(SVA)が行っている事業を2つ紹介します。

詳細は www.japanplatform.org

NICCO:オリーブオイルでつながる3カ国

ヨルダン、パレスチナ、イスラエル3カ国のオリーブオイルの生産関係者が日本のオリーブ農家などと共同でオリーブの品質向上に取り組んでいます。事業の最終段階では関係者の信頼醸成を狙って、皆が一堂に会するワークショップを開催。初めて集う3カ国の人々が目を輝かせて熱心にワークショップに取り組む姿が印象的でした。

オリーブは平和の象徴。3カ国をつなぐ種はまかれたばかりですが、農業という共通項がもたらす平和構築の可能性が感じられます。

またNICCOはUNHCRと共に、ヨルダンに逃れてきているイラク難民に対し、演劇会などを通じて傷ついた心を癒し、ヨルダン人とイラク人の相互理解を促進する活動も行っています。

詳細は www.kyoto-nicco.org



©筆者提供

遠景近景

難民の尊厳と食卓

難民と聞いて常に思い起こすエピソードがある。70年代、ハイジャックやゲリラ活動を世界各地で行っていたあるパレスチナ活動家が「なぜ運動に身を投じたのか」と聞かれたときの答え。

「難民キャンプで国連からの食料の配給の列に並んだとき、自分の尊厳が奪われたことをつくづく実感した」



イラク難民の少女たち

エドワード・サイードの映画『OUT OF PLACE』に出てくる難民キャンプのパレスチナ人家族は、取材陣にあらゆる食事を振舞っていた。客が来たら精一杯肯伸びしても歓待するのが、アラブ社会の慣習である。難民となったアラブ人にとって、つらいのは食べられないことや貧しいことよりも、客をもてなせないことではないか、とすら思ってしまう。

ヨルダンに暮らすイラク人難民に会ったときも、家に呼べないことをしきりに詫言っていた。他人の世話になるしかないこと、他人を世話できないことを情けなく思う感情は、人間が社会的存在である以上、当然だ。いかに人としての尊厳を持ち続けられる難民対策が行えるか。こちら側の人間の尊厳が問われることもある。



酒井啓子
東京外国語大学大学院教授。
アジア経済研究所参事を経て
2005年より現職。専攻はイラク政治研究。



SVA: 絵本を通して 「心の平和構築」

皆さんは難民の子どもたちが描く絵をご覧になったことがありますか?お母さんが血を流していたり、戦車が村を襲っていたり、悲しい絵を描く子どもが多いのが現実です。

SVAは、2000年以降UNHCRのパートナーとして、難民キャンプの図書館を拠点に、タイのミャンマー難民、特に子どもの心を見守ってきました。このプロジェクトでは、3つの難民キャンプの8万4千人を対象に、読書を通じた教育支援、カレン民話・歴史の出版、紙芝居や人形劇などの文化継承を活発化することで、難民の「心の平和構築」を推進しています。SVAの図書館が難民の憩いの場になり、子どもたちが可愛い動物や植物の絵を描くようになったことがとても嬉しく感じられます。

詳細は www.sva.or.jp



絵本に見入るカレン難民の子どもたち



カレン難民の子どもたちが描いた絵



平和構築パイロット支援事業は、過去の南部スーダン人道支援、イラク難民支援に引き続き、UNHCRとのコラボレーションによって相乗的なインパクトがもたらされています。

遠景近景

心の手をつなごう

2004年1月、タイ西部のミャンマー国境近くにあるタムヒン難民キャンプを訪れました。

学校で熱心に勉強する子どもたち、子育てに励む女性、そして職業訓練に意欲的に参加する人たち。祖国を逃れてなお、たくましい人々の姿を目の当たりにしました。

彼らはいつ何時キャンプを去らなければいけないかわかりません。それでも静かな瞳の奥には「生きることを諦めない強さ」がありました。

その眼差しを見た時、自由で恵まれた環境に甘え、いろんなことを先送りにして諦めていた自分に気付きました。

難民とのふれあい、難民支援を通じて、二日二日がより愛おしく大切なものだと感じるようになりました。

難民と私。生まれた世界は違えど同じ人間……未来を信じて懸命に生きる人の心に、国境はありません。

私はたくさんさんの心の手をつなげるために、力を注いでいきたい。



宮崎京
ファッションモデル、2003年ミス・ユニバース世界5位、日本UNHCR協会広報委員として世界難民の日等のイベントで活躍。



菊川 怜 × 平和を築^{つく}る女性たち

国連の平和維持活動など男性社会のイメージが強い平和構築。しかし、実際には女性や子どもが紛争後の帰還民の約75%を占め、故郷での生活再建の“主役”となるなど、女性の視点は欠かせない。UNHCRは『Refugee is...Vol.4』特別企画として、UNHCR駐日事務所サポーターの菊川怜さんをナビゲーターに、外交フォーラムの鈴木順子編集長を司会として座談会を開催し、出席者に「平和を築(つく)ること」とはなにかを語ってもらった。

女性から見た風景



菊川 怜

女優業の他に NTV系『真相報道バンキシャ』でキャスターを務めるなど、幅広く活躍中。2005年1月よりUNHCR駐日事務所のスペシャルサポーターを務める。

写真: UNHCR 文: 古本建彦

平和とは

菊川:

2005年1月のケニアのダダーブ難民キャンプ訪問が、初めて難民とかかわった時だった。その際、日本で担当していた番組を休んだ代わりに、ケニアと日本をつないで生放送をし、さらに帰国後には特集番組で難民キャンプの様子や難民の生活を伝えることができた。それからずっと、難民問題や平和をつくることについて興味を持ち続けてきたので、この座談会を楽しみにしていた。

鈴木:

今日のテーマは「難民とともに築(つく)る平和」。どうしたら平和をつくれるのか、平和とは何か、ご自身の経験に基づいて語ってほしい。

木山:

私が旧ユーゴスラビアの小学校で学用品を配布したとき、小学4年生の女の子から「平和とは明日の計画が立てられること」と聞かされ

た。哲学的なフレーズに驚いたが、平和とは単純に戦闘が終わっていることではないのだと改めて認識させられた。

米川:

そうそう。平和構築というと皆難しいことを考えているかもしれない。選挙や民主化とか。でもたとえばマーケットに自由に行ける、学校に通える、家で安心して眠れるとか**私たちにあって当たり前**のことが実は**一般市民や難民にとって大切**。

岡井:

そういう意味で**人道支援は平和構築の最初の一步**だと思う。平和がないことによって女性や子どもが虐げられ、彼らの将来が阻害される状況は改善されるべきだが、緊急支援ばかりしていても、延々と支援慣れの状態が続いてしまう。**うまくテイクオフできるよう次のステップも同時に考えない**と。

坂下:

岡井さんの話に共感できる。ルワン



【司会】

鈴木順子
青山学院大学国際政治経済学研究所修士課程終了。野村総合研究所勤務を経て、1998年に都市出版株式会社入社、現在「外交フォーラム」編集長。



木山啓子
1994年より、特定非営利活動法人ジェン(JEN)の旧ユーゴスラビア地域代表として現地に駐在、難民・避難民支援活動に従事。2000年より同法人の理事・事務局長。一貫して「心のケアと自立の支援」をモットーに23の国と地域での活動を実施してきた。2005年、日経ウーマン誌「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」2006大賞受賞。



岡井朝子
1989年一橋大学卒業後、外務省入省。在バキスタン大使館、国際協力局政策課企画官(ODA予算担当)等を経て、2007年3月より2009年1月まで人道支援室長(UNICEF、UNHCR、WFP等9つの人道支援機関を所掌)。2009年2月よりアフリカ第二課長。



ダに調査に出かけたことがあったが、ルワンダから難民として出て行った人がコンゴで虐殺にあったと伝えられた。さらにルワンダでは紛争関係者の裁判も行われていて、言わば「紛争が微妙に続いている」という状態だった。でもこうした現状はあまり注意がはられない。平和構築といながら、紛争が終わると支援や関心が下がってしまうこともあるのでは。**紛争後の状態にはあまり考えがまわっていない**を感じる。

米川:
たとえばコンゴにはルワンダ出身の武装グループもいる。彼らがルワンダに帰ることも必要だが、その後うまく社会に溶け込めるのか、和解があるのかも大切。帰還すれば問題が解決すると単純に考えている人もいる。でもそうじゃない。人間だから感情の問題もある。

木山:
それは大きい。生活実感として「このまま続ければいい生活が待っている。将来に希望が持てる」ということが、帰還した難民の定着に大事。それがあから努力し、蓄えて、自立につながっていく。緊急事態

の時から将来の自立をイメージした支援をすることが大事だと思う。

自立を尊重した支援を

鈴木:
ここで自立がキーワードとして出てきた。また地元のオーナーシップ(主体的関与)の大切さもしばしば取り上げられる。では人々の自立を尊重した支援とはなにか。

岡井:
単純に国が国民の自立の面倒を見ればよいと思ってしまうこともあるかもしれないが、国家機能が実質的に存在しない国(Fragile State)もある。そういう場所ではどう人々を保護し、自立を助けていくのか。国のオーナーシップの尊重と、自立支援のバランスは難しい問題だと思う。だが、一般にキャパシティー・ビルディング(能力強化)は一にも二にも大切。

米川:
キャパシティー・ビルディングとは人材を育成するということだと思う。でもそれは場合によっては地元の価値観を無視して別の価値観を押し付けることになってし

まう。その国固有のものを育てていく、組織や社会を育てていく「キャパシティー・ディベロップメント」という概念が必要だ。

岡井:
国家機構を一からつくり上げるというのは本当に大変なこと。尊重されるべきオーナーシップとはいったい何なのか。**自助努力という援助哲学が全く通用しない**。例えば南部スーダン。医療、教育などの基本的公共サービスを提供すべき地方行政も壊滅状態で、地方公共団体の再建から始めなければならない。草の根で「一人ひとりが安心して暮らせる」人間の安全保障と、上流の行政システムづくりとを平行して進め、一体性のある国づくりにつなげていくことが重要。

木山:
一方、現場では自分の将来に希望が持てること、明日を信じられることがすごく大事。それは一人では達成できない。どうしようもない絶望的な状況では人は自分のためではなく、他の人のためなら頑張れることもある。**「将来のよりよい生活につながっている」と信じられるから、地元にとどまって国づくりをやっていること**思



米川正子
国際協力機構(JICA)アフリカ部委員専門員。UNHCR職員として、主にアフリカ各地や緊急現場での勤務を経験。前職はコンゴ民主共和国東部のゴマ事務所長。特に緊急事態が続いている現場にて、市民・難民の外部アクターへの強い依存を実感。エンパワメントが必要と、平和構築を志す。



坂下可奈子
立教大学法学部3年在籍中。UNHCRユース事務局の初代共同代表として活躍。大学2年の夏休みにルワンダを訪問し、難民問題に対する見解を深めた。将来の夢は映像制作会社に入って、声なき声をたくさんの人に届けること。



える。そういう人の気持ちの部分が大事
だと思う。

菊川:
平和って単純に、漠然と考えると、私なら衣食住が満たされること。だけど生きる目的や未来の目標がないと精神的自立ができない。でもそれをどうやったら手に入れられるのか。日本だったら生活の自立はある程度できているので、じゃあ目標は自分の努力で見つけようと思えるが、南部スーダンのようなところでは「どこから手をつけたいんだろう」と思ってしまう。

木山:
菊川さんのような方が現地に行くだけで人は元気づけられる。旧ユーゴスラビアに自分が入った時も、市民から「君たちのような無防備な外国人が街を歩いているのを見るだけで『平和になった』』と思える。明日に希望をもてる」と言われた。「日本の女優が自分たちに興味を持ってくれた」というだけでもすごく勇気づけられると思う。

坂下:
木山さんの話はよくわかる。皆さんの話

が大きすぎて、私も何ができるだろうと考えてしまう。専門的な平和構築の現場は専門用語ばかりで“外国語”のように聞こえる。何を言っているのか分からないことがある。それを簡単な言葉にしてわかりやすくつたえること、和らげることも必要だと思う。

女性の視点

岡井:
ところで、今日は女性だから言えることってあるかな、と考えていた。現場では女性がすごく多い。日本人の採用を国際機関に働きかける仕事もしているが、驚くほど多くの日本人女性が平和構築の現場で大活躍している。それに支援対象者も半分以上は女性や子ども。男性は不在で母子家庭も多い。保健・教育など女性ならではの分野があると思う。

菊川:
女性じゃないと聞いてあげられない話もある。4年前にケニアの難民キャンプを訪ねた時にも感じた。たとえば性的な暴行のことなどは男性には話しづらい。女性が相手だから話せるということもあると思う。

米川:
津波の後にインドネシアのアチェに行って女性グループと話した時に気づかされたのは、援助物資に一つだけ含まれていなかったのが女性の下着だったということ。女性たちは「これも、あれもある。でも女性用の下着だけない」と教えてくれた。そういったことは男性には伝えられない。

読者へのメッセージ

鈴木:
最後に平和構築とは何か、読者へのメッセージを込めてうかがいたい。

米川:
簡単にいえば普通の生活ができる、自由にやりたいことがいつでもできるようにすることが平和構築だと思う。そのためには現状を知り、それを行動に向けること。たとえばコンゴにはコルタンという、携帯電話やノートパソコンに使われるレアメタルがある。日本のマーケットには今、コルタンを使っただけのいろんな種類の商品がある。一方コンゴではそれが原因で紛争になっている。消費者として、意識改革を訴えるとか、などやってもいいのでは。



◎筆者提供

マエキタミヤコ
コピーライターとして1997年よりNGOの広告に取り組み、2002年にメディア・クリエイティブ「サステナ」を設立、代表に就任。「100万人のキャンドルナイト」呼びかけ人代表、「ほっとけない、世界のまずしさ」キャンペーンアドバイザー。現在、東京外国語大学平和構築学助教授及び上智大学・立教大学非常勤講師、UNHCRのブランディングにも協力。

迫害を逃れた難民の現状はほとんどの場合「カッコよくありません。でもその現場で、難民の人たちに人間の尊厳を教えられるというのです。哀れだから手を差し伸べるのではなく、人間だから当たり前前に助ける。そのうちに苦難の中にいるその人たちのカッコよさが見えてくる。そんな彼の体験を、対等感のある日本らしい難民支援として根気よく増殖させることは可能で、それはいつの日か世界の争いの目を解くことに繋がっていくのではないかと。難民問題は人権問題。私は教えてもらったそのことを最短距離で伝えていきたいと考えています。

一見逆に感じる、これは広告業界で俗にいう過激なコピー。人々に振り向かれない事柄を、どうにか注目させたい、人の心をキャッチしたいときに使う手法です。たとえ過激だと批判されるリスクがあったとしても、難民の苦境に人の意識を向けたいという岸守さんの思いに、難民支援が一般的な理解を得ることの切実さをあらためて知りました。

ある日、UNHCR駐日事務所の岸守さんが表参道ジャックの広報の相談にとやってきて「一番伝えたいのは、難民はカッコイイということ」と言い、みんなの度肝を抜きました。

遠景近景
難民ってカッコイイ。





坂下:

私にとって平和構築とは「つなくこと」。見過ごすこと自体がすでに平和じゃない、ということに気づくことが大切。そのためには事実を「つなく」、つまり情報を伝えることが必要。ジャーナリズムもいいが、たとえば映画を使ったり、面白いイベントを企画して、柔らかくして伝えることが大事だと思う。

岡井:

シエラレオネを舞台としたハリウッド映画の「ブラッド・ダイヤモンド」は、有名人が映画の波及効果を考えてやったこと。一見「娯楽」映画から想像を超えたアフリカの現実の一端を感じ取ることができる。見て、知って、考え、何かやりたいと思うきっかけとなるのでは。

木山:

誰でも、その場所ですることが必ずある。みっともないほどあかくことが逆にカッコいいぐらいの気持ちで頑張るといい。一人ひとりの命は等しく尊いはずなのに、どう考えてもそう思えない状況がある。それを変えていくために今日からできることがあるはず。

鈴木:

今日は菊川さんにたくさんの宿題が寄せられた(笑)。私たちの宿題でもあるけれど。

菊川:

確かに知ることは大事。でも「知ったとしても何をするのか」という問題もある。道を歩いている普通の日本人が人道支援や平和構築にかかわりたいと思うだろうか。知って終わる、面倒くさいという人が多いと思う。行動に移すにはモチベーションが必要だと思う。自分にとって楽し

い、やりがいがあるなど「自分が何をやりたいのか」という視点も大切だと思う。平和構築も、彼らの未来や生活だけでなく「私たち自身がどう生きていくか」ということが根本にあると思う。難民が生きていくことも私たちが生きていることと根本的には同じだと思う。自分の明日のためにやっていくと考えると、生きる喜び、そして平和構築にもつながっていくと思う。



遠景近景

支援の先にある「生活」

90年代にウイーンでボスニアの難民キャンプを取材したことがある。夏休みで学生がいない大学の寮を開放して、難民たちが避難生活を送っていた。夫や父親、兄弟と離れ離れになった女性たちはばかりだった。赤ちゃんと離れた女性は、子どもの着替えやおもちゃだけを保持して着の身着のままウイーンにたどり着いた。おもちゃの鮮やかな色彩と、涙をためた女性の眼差しを覚えている。支援しているNGO担当者によると、補充するそばからトイレからトイレ、ベーパーが無くなってしまふという。持ち物を全て失った難民たちにとって、「自分だけのものを確保しなければいけない気持ちがある」と思った。

支援物資の倉庫を見せてもらったことにした。待たされた場所には年代もののソファ、テーブルや椅子、絵画、レコードプレーヤーなど、ちよつとした住宅展示場のようだった。倉庫を見せるとさうとうとうかかれましたと尋ねると、ここがそうです、絵や音楽がなければ生活とは言えないでしょう、と言う。支援物資とは食糧や水、毛布や衣服という固定観念があっただけに、レコードや絵画も支援物資として備蓄され、役立てようとしていくことに驚きを感じた。

当然のことながら、緊急な支援物資として食糧や水、医薬品は欠かせない。しかしそれだけでは生活とは言えない。支援活動をしているNGO担当者の視線の先には、目の前の難民の救済とともに、その先にあるべき本来の生活がはつきりと見えていたのだらう。

難民たちがいる教室に戻ると、黒い髪をしたボスニア難民の女性たちは、アジアから来た同じ黒い髪の私を歓迎してくれて、車座になって何か相談しているようだったが、コーヒを飲んでいきなさいと言われた。不自由な生活の中で、馳走になることに一瞬、躊躇したが、難民たちは普段の生活では、いつもこうして客人を迎えたのだらうことを思い、ちこそうになることにした。難民たちに少くも、まだ見たことなかった「生活」の表情が戻ったような気がした。



◎筆者提供

道傳愛子
コロンビア大学大学院修士(国際政治)。NHKニュース9、バンコク特派員、NHK海外ネットワークなどを経て、解説委員。東南アジア、途上国の開発の課題などグローバル・イシューズ担当。



女性の自立支援の取り組み

難民支援の最前線に携わった経験について講演した際、「皆さんの仕事は、賽の河原で石を積むような仕事ですね」と言われたことがあります。

セルビアのミロシェビッチ体制が、コンボのアルバニア系住民を民族浄化の対象として弾圧し、NATOは1999年3月からセルビア空爆を実施。同年6月の和平後、コンボは国連の管理下に置かれ、私はUNHCRの職員として2年間コンボに駐在しました。弾圧や空爆で避難した何十万人ものアルバニア系の人々が再びコンボに帰り、戦争で破壊されたふるさとで再出発するのをお手伝いするというのが、当初の任務のはずでした。

しかし今度はアルバニア系の人々が、ミロシェビッチ体制下で主流派だったセルビア系住民らに「復讐」を始めたのです。セルビア系住民らが脅迫、放火、暴行、誘拐、そして殺害の対象になり、私たちはこうした事件に振り回されていました。私が受け持っていた町では、以前は1万人ものセルビア系の人々が暮らしていたのが空爆後はわずか15人に減り、瓦礫の中にぼつんと残る家に、家を守るために残っていました。人々の悲しみの涙、そして、民族間の憎しみの言葉に触れる毎日で、自分の無力さに意気消沈していました。

まさに「賽の河原で石を積む」仕事の中で私に希望を与えてくれたのは、女性が持つ平和をつくる力でした。男性は立場があるので「敵」との話し合いにはなかなか応じてくれませんが、女性は子どもに食べさせなければならないということもあり、よりプラクティカルに考えることができます。

そこで、アルバニア系とセルビア系、それぞれに女性グループをつくってもらい、少額の現金収入が手に入るような、蜂蜜づくりや手工芸品づくりのプロジェクトに携ってもらったのです。そうすると、原料をどこから仕入れ、製品をどこで販売するかなどを話し合わなければ、現金収入になりません。無理強いはいしませんでしたが、向こう側に会ってみてもいいかなという雰囲気がゆっくりとできてくるのです。アルバニア系とセルビア系の人々が「民族対話」と大上段に構えた場に参加するのは当時では想像もできないことでしたが、お金の絡む実務的なことでは、アメリカ軍の護衛つきではありましたが、それが可能でした。一緒にコーヒーを飲んで話すことにこんなに意味があるのかと、自ら手掛けながらも驚かされました。これは、平和構築と経済的自立支援とを組み合わせた「コンボ・ウィメンズ・



WLLによるロマ帰還民女性のパン屋経営プログラム(セルビア)

イニシアティブ」の一環で行われたもので、同様の取り組みがルワンダやボスニアの復興でも行われました。

このような、かつて対立した民族が共に生きることを支援するプロジェクトのほか、夫を紛争で失い女手一つで家族を支えている難民のお母さんや、性暴力の被害に遭い閉鎖的な社会の中で村八分の状態に追いやられた女性たちが自立していく上で、職業訓練や少額の収入が手に入るような支援プロジェクトは欠かせません。

UNHCRでは、世界中の女性指導者や経営者、趣旨に賛同する企業・団体に呼びかけ、難民女性の自立を世界中の女性の連帯で支える「ウィメン・リーディング・フォー・ライブリフズ Women Leading for Livelihoods (WLL)」プログラムを始めました。帰還民女性への農業訓練(コンゴ民主共和国)や、ロマの女性によるパン屋経営(セルビア)など具体的な成果を生むプロジェクトがWLLプログラムのもと次々と立ち上がっています。

日本UNHCR協会では、難民女性の自立を応援する連帯の輪を拡げたいと願い、WLLプログラムへのご寄附を呼びかけています!

詳細は www.japanforunhcr.org/act/t_woman.html

根本かおる
UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)での任務を経て、2007年より日本UNHCR協会事務局長に就任。難民問題について広報活動を行うとともに、国連の難民支援への寄附・募金の拡大に努める。日経ウーマン「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2007」受賞。

遠景近景

新JICAの平和構築支援

「主たる人々が恩恵を受けるダイナミックな開発(Inclusive and Dynamic Development)」という新しいビジョンを掲げて2008年10月に発足した新JICA。技術協力、有償資金協力、無償資金協力という3つの援助手法の一体的な運用により、開発途上国の人々のニーズに応じた質の高い援助が実施されることを期待されている。



南部スーダン・ジュバの職業訓練センターで、レンガ積みを学ぶ人々

平和構築支援に関しては、①社会資本の復興、②経済活動の復興、③政府の統治機能の回復、④治安強化を復興支援の重点分野とすると共に、紛争予防配慮の視点を重視した支援を実施。アフガニスタン、イラク、スーダンなどの復興開発支援、フィリピン・ミンダナオの和平プロセス支援、ネパールの憲制支援などに加え、UNHCRとの連携により、人事交流や安全管理研修の他、避難民にも裨益するような開発援助を促進し、人道支援と開発援助のリンケージの強化にも努めている。

今後は、現場レベルでの平和構築支援事業の推進に加えて、平和構築に関する人材の確保、これまでの知見・経験の体系的な整理・活用、資金協力と技術協力を組み合わせた包括的な支援ツールの開発などにも努めていきたいと考えている。

黒澤啓
JICA公共政策部ジェンダー・平和構築グループ長。2000-2003年にUNHCR本部に赴出し、人道と開発のギャップを埋める作業に貢献。

ビジネス界でも平和構築

「平和構築とビジネス」研究会(東京大学産学連携本部と東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラムの共催)を正式に立ち上げてから約1年半が経つ。平和構築とビジネスという2つの言葉の組み合わせが少し変わっていたようで、各方面から少なからず関心をいただき、おかげでこれまで7回の研究会を開催してきた。この研究会では、平和構築に企業が関わる実践例や、その際の連携の在り方、国連グローバル・コンパクト(企業の自主的な行動原則)など関連の規範について研究してきた。

平和構築という言葉にも色々な定義があるが、この研究会では紛争の予防から、紛争発生時の緊急支援、紛争終結後の緊急復興、さらには中長期開発まで、紛争に関わる様々な段階における活動を含む概念として平和構築を広く定義している。このように捉えると、難民に対する緊急人道支援や帰還支援、さらには帰還後に社会に円滑に再統合できるための職業訓練支援なども平和構築のスコープの中に入ってくる。

難民支援といえば、従来は国連やNGOが行うものと考えられてきた。難民キャンプの設営・運営やそこの緊急物資の供与などは、確かに国連やNGOでなければできないし、その役割は今後も変わらないだろう。

しかし、最近では企業が難民支援に関わる事例が増えてきた。例えば、UNHCR本部は、企業との連携枠組みとして、Council of Business Leadersという会議を立ち上げ、企業と協力して難民支援を実施している。MicrosoftやNikeが中心となり、それぞれの企業が資金貢献を行うのみならず、それぞれの本業の強みを生かした支援を行っている。



©Shinsuke Kamioka
エチオピアにおけるユニクロの難民支援

日本企業も決して負けてはいない。代表例はユニクロだ。ユニクロはUNHCR駐日事務所と協力して、店舗で回収した衣料などをリユースして、アジアやアフリカの難民に提供している。難民キャンプでは衣料不足が深刻で、この支援は難民の衣料に対する無限のニーズを満たしてくれる。また、色とりどりの衣料品は、難民の人々の生活に彩りを与え、彼らの自信を取り戻すのにも貢献する。

このように見えてくると、企業が平和構築に関わる際、「本業」と「連携」という2つがキーワードとなるのがわかる。「本業」とは、企業が独自の強みを生かして貢献をするということだ。ユニクロの支援は良い例で、衣料品を作る企業が自社の衣料品を供与している。現在のユニクロの貢献は無償支援だが、将来的には、例えば難民帰還地域でユニクロ製品の生産工場を立ち上げるなど、完全にビジネス・ベースで貢献を行うことも可能である。

「連携」とは、国連やNGOとの連携だ。平和構築という特殊な文脈で企業が何かを行うためには、この分野で強みを有する国連やNGOとの連携は欠かせない。この点、欧米に比べて日本では、企業と国連やNGOとの連携を容易にするための相互の関係構築や枠組み作りが未だ不十分である。UNHCRと企業との連携にしても、ユニクロとUNHCRとの協力のようなアドホックな協力にとどまらず、UNHCR駐日事務所といくつかの日本企業との間で、日本版Council of Business Leadersを立ち上げてはどうだろうか。

詳細は

human-security.c.u-tokyo.ac.jp/saiji_under.htm

水田 慎一

外務省でコンゴ、東ティモールの紛争解決・復興開発に従事後退職し、現在三菱総合研究所主任研究員。東京大学大学院「人間の安全保障」プログラム博士後期課程に在籍しつつ、「平和構築とビジネス」研究会を主宰。



©Shinsuke Kamioka

ユニクロのTシャツを着こなすエリトリア難民(エチオピア)

平和構築の人材育成

外務省が平成19年度に立ち上げた「平和構築分野の人材育成のためのパイロット事業」は、文民の平和構築の担い手を養成することを目的とした事業です。外務省の委託を受けた国立大学法人広島大学内事業事務局とNPO法人ピースビルダーズが構成する「広島平和構築人材育成センター(Hiroshima Peacebuilders Center: HPC)」が中心になって事業運営を行っています。具体的には、国内研修、海外実務研修、就職支援の3つを柱にして、平和構築の現場で活躍する日本及びアジアの文民専門家を養成しようとしています。海外実務研修では、UNHCRの地域事務所にも多数の研修員が派遣されています。世界には平和維持活動の研修セン

ターなどは多数存在していますが、この事業では恒常的な研修センターがありません。その一方で、「研修員」は「卒業」後も継続的に支援対象とされる恒常的な存在です。その反映としてこの事業は、単なる研修をこえた、総合的な「人材育成」を行うという特徴的な(おそらくは非常に日本的な)性格を持っています。単なる「研修」ではなく、「人材育成」をするということ。それは、研修センターではなく、平和構築を担う人材を、主役にするということです。人材の育成を通じた平和構築。それがHPCが探求していることです。

詳細は www.peacebuilderscenter.jp



©外務省

HPC 国内研修の風景

篠田英明

広島大学平和科学研究センター准教授。2007年より広島平和構築人材育成センター事務局長。2008年には、国連平和構築支援事務局との共催による、平和構築の実務者を集めた第1回ワークショップの開催に携わった。

ブータン政府の民族主義政策の影響で1990年代初めにブータンを逃れてきた約10万7000人のネパール系ブータン難民が、16年以上ネパール東南端にある7つの難民キャンプで暮らしています。UNHCR ダマク事務所は、この7つのキャンプを管轄し、難民の保護や物資支援を行っています。私は現在、ここで保護・登録担当官として主に難民の登録を担当しています。具体的には、難民のステータスを証明する写真入り難民IDカードに関する啓発キャンペーンを実施し、16歳以上の難民約76,000人にIDカードを配布したり、人口調査に参加しなかった難民の再登録、庇護希望者の審査や登録などの仕事をしています。また、第三国への再定住を希望する難民のインタビューや、そのための提出書類の準備も行っています。

ダマクでは2007年より、長年ネパールに定着することもブータンに帰還することも許されず四方塞がり状態であったブータン難民の第三国定住がはじまっています。2008年10月までに、6200人以上のブータン難民がアメリカ合衆国、ニュージーランド、オーストラリア等の国々に再定住しました。16年以上難民キャンプでの生活を強いられた難民たちが新しい生活を始めようと笑顔で出発していくのを見るのは、うれしいかぎりです。難民の人生に関わりながら、平和の構築に貢献できる仕事にやりがいを感じています。今後も、難民への支援を通して平和構築に携わり続けたいと思っています。



©筆者提供

辻澤明子

HPCプログラムアソシエイト。2007年にHPCより、UNVとしてUNHCRネパールのダマク事務所に派遣された。HPCの海外実務研修に引き続き現在、同事務所のアソシエイト・プロテクション・オフィサー。



©楠苗也

詳細は www.peacebuilders.jp

また、「カフェ・マラバ」という最高品質のスペシャルティコーヒーもフェアトレードで輸入・販売しています。このコーヒーは広島市内にある私たちのカフェでも飲むことができ、「コーヒー一杯からできる国際協力」として人気を集めています。

「Win x Win型」の国際貢献を展開しています。これは、ルワンダで生産されたエコバッグ「Peace Bag」をフェアトレード形式で輸入して現地の経済復興を支え、広島では「ハッグ利用推進によるエコ活動への参加を広く呼びかける」ものです。

遠景近景
Peaceを支え、Ecoを学ぶ

広島とルワンダには「戦後(紛争後)復興」を遂げるといふ共通の通過点があり、ルワンダの人々にとって、ヒロシマはある種の憧れと目標でもあります。特定非営利活動法人ピースビルダーズは、そんな広島に拠点を置くNGOとして、ルワンダの紛争後復興を支援しつつ、同時に広島の皆様にも楽しんでいただける



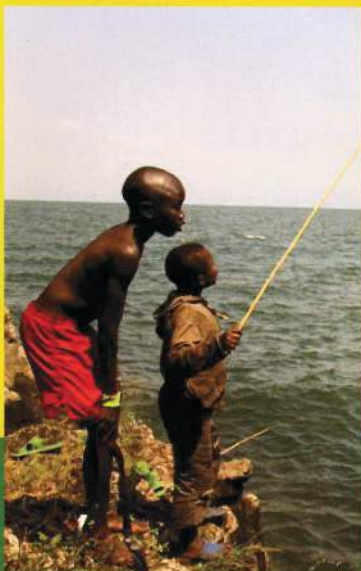
ルワンダの経験「平和構築のモデルケースに」



ルワンダの経験・平和構築のモデルケースに

ルワンダは、豊かな自然と丘陵地帯の風景から「千の丘の国」と呼ばれています。約15年前には、大虐殺によって約100万人の犠牲者が発生、約350万人が難民や国内避難民になるなどの悲劇がありましたが、現在は着実に平和が定着し、平和構築の「モデルケース」となりつつあります。

1994年に国連による介入で虐殺が終結して以来、ルワンダは復興に向けた努力を続けてきました。虐殺に関与した者をルワンダ独特の法廷「ガチャチャ」で審理するとともに、過去の非人道的な行為を「許す」という国民の和解が進んでいます。2003年5月には、国民融和やルワンダ国民の平等を定めた新憲法が制定されました。女性の社会進出も進み、議会では48.8%、内閣では33%、そして最高裁判所では44%を女性が占めています。



今日ルワンダは、コーヒー、お茶、バナナの生産が盛んです。特に豊富な水と肥沃な火山灰土壌、丁寧な手作業によるスペシャルティ・コーヒーは、世界最高のコーヒーのひとつと評価されています。また、エコツーリズムにも力を入れ、なかでも世界に約七百数十頭しか生息していないとされるマウンテンゴリラを見ることのできるゴリラ・トレッキングツアーは、特に人気です。

皆様、ルワンダは自然の豊かな美しい国です。また、アフリカで一番安全な国といわれています。是非、一度訪れてその素晴らしい経験してください。

詳細は www.rwandaembassy-japan.org

エミール・ルワマシラボ
ルワンダ共和国駐日大使。2度の難民体験を持つ。フランスで外科医を務め、ウガンダなどで医学を実践した後、1998-2004年までルワンダ国立大学学長。

写真：楠哲也



人づくりの風景

表参道ジャック 2008

街からはじまる難民支援 — 難民ってカッコイイ。 —



ヨルダン避難キャンプに逃れてきた親子を写したこの写真は、当日の来場者により最も「カッコイイ」1枚に選ばれた。

【イベント開始】



11月26日の表参道ジャックは晴天の中、開催された。パレード、スタンプラリー、トークショー、クッキング、キャンドルナイトなど、UNHCR、UNHCRユース、J-FUN(日本UNHCR-NGO評議会)が共催してさまざまな企画が同時進行で進められ、多くの参加者と難民・難民支援について考え、行動する貴重な一日となった。

【スタンプラリー】



表参道に店を構える12の協賛店舗においてスタンプラリーを開催。約100名に及ぶ参加者は、表参道各所を巡りながらクイズに答え、J-FUNが行なう難民支援活動への理解を深めた。ゴール地点の日本看護協会では、21の協賛店舗提供による記念品が参加者に贈呈された。パレード沿道で配られたチラシを手に、当日参加される人も多数あった。

【トークショー】



表参道ジャック2008のコンセプト「難民ってカッコイイ。」をテーマに、パレードの終着点である日本看護協会でトークショーを開催。第1部のパネルディスカッションでは、難民の方3名を含む7名のパネリストがそれぞれの立場・経験から「カッコイイ」に対する自分の思いの丈を語り合った。第2部「NGOをプロデュース」では難民支援を行うNGOそれぞれの活動をUNHCRユースが紹介、各界で活躍中のコメンテーターに意見を求めた。トークショー全体を通して、日本で生活する私たち一人ひとりと「難民支援」どの在り方について思いを確かめる貴重な機会となった。

広がっていく風景

迫害や紛争から逃れて悲惨な目にあっている難民が置かれている状況は、残念ながらほとんどの場合カッコイイとは程遠いものです。しかし、「故郷を追われ、苦勞した分だけ、少しは他人に優しくなれた。難民になったことで少しは強くなった」「私たちがカワイソウと思わないで。友達として共感して欲しいから」と言った難民の方が実際にいました。彼らのひたむきな姿勢は、容姿や難民であるか否かに関わらず、カッコイイと感じられるものでした。

「難民ってカッコイイ。」という言葉は、難民になったことで自らを哀れむことなく、持てる力を振り絞って輝いて欲しい、そのような難民の生き様をみることで「難民は可哀想だから援助する」ではなく「難民の頑張っている姿に共感し、その背中を少しだけ押してあげる」という新しい難民支援につなげていきたいという、我々の祈りの言葉でもあるのです。

【クッキング】



ミャンマーのカチン族の家庭料理をABCクッキングスタジオにて手作り。試食の時間になると「おいしい」「思ったほど辛くない」などの感想がもれた。参加者の中には、初めて料理をしたという人も。「思ったより料理って簡単。これからは日本食にもチャレンジしたい」と感想を述べた。カチン族の先生方も民族の伝統料理を日本の若者たちに伝え、喜ばれたことが「嬉しい」と語っていた。



©Katsuya Soda

【パレード】



ユニクロ特注「難民ってカッコイイ。」のキャッチフレーズ入りウィンドブレーカーをまとい、参加者約200名が午後1時に国連大学ビル前を出発。書家の武田双雲さんが、「不遇な人が苦勞した分だけ優しくなったり強くなれたりするイメージ」で書かれた「難民ってカッコイイ。」と掲げたのほりを持って青山通り、表参道を歩くパレード一行はオシャレな街並みの通行人の注目を浴びていた。

【キャンドルナイト】



©UNHCR

日も暮れ、イベントの締めくくりとしてのキャンドルナイトはDJ武村貴世子さんの司会で盛り上がった。日比野メディアランナーの大型中継テレビを通して、京都の三条通りジャック会場との同時中継、シンガーソングライター松田陽子さんのパワフルなライブなど、参加者が火をともしたキャンドルを持って、難民について考える一日を振り返る時間となった。RENの石谷尚子さんが最後に朗読した「ママ・カクマ」の詩の一節にあるように、「将来がわたしたちを待っている」という言葉を心に刻み、これからも多くの皆さんと一緒に難民支援の今後を考え続けたいとの思いを胸に閉幕した。

詳細は www.unhcr-youth.com



表参道や三条通りで一日イベントをして難民問題が解決するわけではありません。しかし、「難民ってカッコイイ。」という言葉で難民問題に関する注意を喚起し、難民一人ひとりに名前や夢があることを思い出し、難民を支援することがいかに難しく、そして大切かということをみなさんと一緒に考え続ける契機にしたいと願っています。

最後に、東京渋谷・表参道、京都・三条通りの皆様を初め、今回の企画にご協力いただいた全ての方に厚くお礼申し上げます。

国連難民高等弁務官 (UNHCR) 駐日事務所
日本UNHCR-NGO評議会 (J-FUN)
UNHCRユース

難民ってカッコイイ。 登

題字：武田双雲

平和の風景を描く

巻頭随筆

「九〇秒間で語る平和構築」 国連大学オープンキャンパスにて

岸守

国連難民高等弁務官事務所
(UNHCR) 駐日副代表

きしもり はじめ
東京大学卒業後、一九八七年外務省入省。一九九三年三月より在ジュネーブ国際機関日本政府代表部に勤務。二〇〇二年十月より一年間UNHCR執行委員会のラオス・ルーツワール(本会議への報告者)を務める。その後、在タイ王国大使館一等書記官を経て、〇五年六月より現職。J・FUN(日本UNHCR NGO評議会)共同議長も務める。

今年三月二五日午後、東京青山にある国連大学にて、パリトン・パスの歌声を背景に東ティモールやルワンダのフェア・トレード珈琲が飲めるオープンカフェがオープンし、「学園祭」が始まった。広島大学を拠点とする平和構築人材育成パイロット事業の集大成である「東京平和構築シンポジウム2008」のアウトリーチイベントである。

普段は生徒も授業もない国連大学は敷居が高いと巷で囁かれているらしい。でも、この日の午後は平和を合言葉に一般に開放された。国際機関やNGO、国際協力機構(JICA)等専門家の議論に加えて、学生たちも平和の行動計画を発表し、ツアーを企画して国連機関の仕事場を公開した。

UNHCRが主宰した「九〇秒間

で語る平和構築」セミナーは、そんな風景の二コマである。

薄暗いウタントホルの舞台の上には男女二体のマネキンが置かれていた。登壇者は皆、サステナがデザインしたユニクロ特製Tシャツを手に持っている。そこには「手をつなごう」、「深い呼吸」、「普段着の平和構築」、「生きる力」、「火種と火消し」

等、思い思いの平和のキーワードが書かれている。そのTシャツをマネキンに被せ、九〇秒間で平和への想いを語ってもらった。二人の登壇者は、女優、歌人、写真家、元難民の大使やデザイナー、ユニクロやABCクッキンクスタジオ等の企業、NGO、外務省、JICA、有識者、メディアと多岐にわたる。出色は、国連大学の清掃を十八年間担当してきた大泉村

を磨くことであり、それが平和に繋がるのではと訴えた。

平和構築は今ちよとしたチームだ。日本が平和の創り手として国際社会で責任ある役割を果たすことは重要である。同時に、平

和構築は国連や政府やNGOといった特別な人に任せておけばいいものではない。私たちにもできる、「平和をつくること」とは何だろうか。

その日はいつもより少し早く帰宅して、妻の手料理を食べながら一日の出来事について一緒に話した。少なくとも私にとって世界の平和とは、家族や仲間を慈しむ心の延長にあるものだ。

貴方なら、九〇秒間で平和について何を語りますか。



©筆者提供

GAIKO FORUM 2008-5



①



②

- ① イリディミ難民キャンプ(チャド)
- ② カブールの学校に戻った少女たち(アフガニスタン)
- ③ アフガニスタンに帰還途中の難民たち
- ④ ホズ・アメル難民キャンプ(チャド)
- ⑤ ポンガ難民キャンプ(エチオピア)

広がっていく風景

90秒間で平和を語る

セミナー「90秒間で語る平和構築」では、計26人が独自の経験に基づいて平和を語りました。ここでは、そのうち3人の言葉を紹介します。



©筆者提供

長有紀枝・難民を助ける会理事長



©筆者提供

水野孝昭・朝日新聞論説委員



©筆者提供

渋谷ザニー・ファッションデザイナー

「過去から未来へ」

私たちの仕事は、人道支援の現場で今、目の前にいる人々を支援すること。しかし現場ではものすごく忙しいことが言い訳となり、本来学ぶべき地域の背景などを深く学んでいないように思う。また、私たちは国際協力に携わる日本のNGOでありながら、日本の過去の歴史については無頓着だと感じることがある。私たちは長い歴史の中の「今」にいる。過去から学ばないと本当の平和は訪れないと思う。過去に亡くなった人をもう一度殺さないためにも、過去から学んで、未来に進みたいと思う。

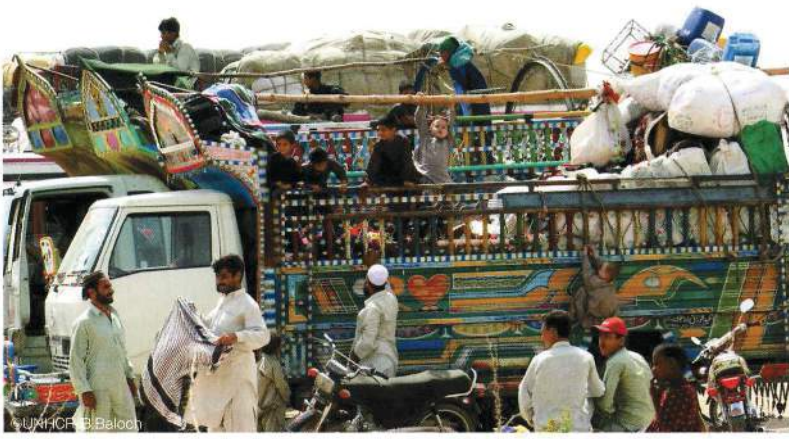
「人権」

平和とは、とても美しい言葉だ。すごく難しい言葉でもある。平和の反対は、戦争だろうか。もちろん殺してあったら平和はない。でも戦争がないから即、平和だとは言えない。今のチベットやミャンマー(ビルマ)を見てほしい。表面的な暴力がないだけでなく、一人ひとりの人権が十分に守られていないと平和ではないと思う。国連は世界の先住民族を尊重するという宣言を出している。少数の人々の人権を守ることが平和の基礎になる。広い世界と自分たちの足元の両方を見て、平和をつくっていききたいと思う。

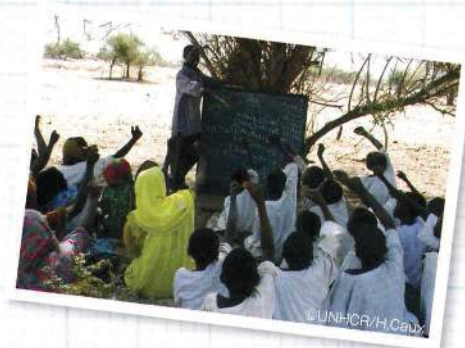
「難民は「敗者」ではない」

難民は敗者なのでしょうか。違います。殺戮や迫害から逃れ、困難や障害を乗り越えて、堂々と生き延びている姿は紛れもない「勝者」なのです。私は2007年の秋に一つの決意をしました。悲劇的で孤独な国、ミャンマーの人々を救う何らかのきっかけとなるかも知れないという思いから、自分がミャンマー難民であると公表しました。日本の方に、難民と共存することを恥だと思ってほしくありません。難民問題は地球に生きる人類全体の問題です。そこに「ひと」がいます。それを救えるのは「ひと」のみぞできることなのです。

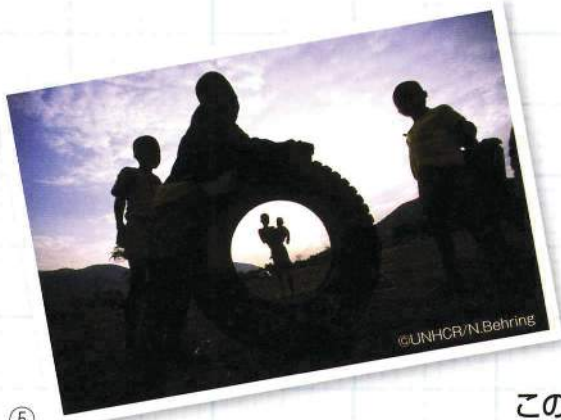
詳細は jp.youtube.com 内の「平和構築の学園祭@国連大学オープンキャンパス」



③



④



⑤

広がっていく風景

誰もが平和を望んでいても、平和でいることは難しい。
だから、平和の風景を描くことから始めよう。
この世から武器がなくならなくても、難民がいなくならなくても、
平和を築るために今できることはあるはずだ。